

中国における少数民族教育がアイデンティティの形成に及ぼす影響

*陳 烏 日 汗

はじめに

1. 中国の少数民族教育における「多元文化政策」
2. 中国の少数民族学校における教育実践

結語

はじめに

民族問題は多民族で構成されている中国にとって、歴史的に残されてきた課題であり、時期によって様々な政策や対応がなされてきた。しかし、民族問題は一つの政策規定や方針により容易に解決される課題ではない。とりわけ、民族教育は自民族の文化の維持と発展に重大な影響を及ぼすことから特に重視されてきたといえる。中国で言われている「少数民族教育」とは特に漢民族以外の民族に対して実施される教育を示し、各少数民族に対して、すべて自民族の言語と文字を使用し、発展させる自由を有することを認めている（格日樂 2006）。

中国の民族教育に対する理念や理念を実現するための教育政策は時代によって大きく異なる。1993年に社会主義による国家統一の柱として、「民族の平等と団結」の理念が掲げられ、「一律に平等」に扱われる諸民族が構成する「平等社会」の実現を追求していくなど、少数民族文化を尊重した教育が強調された（小川 2001）。具体的には、民族学校の設立と民族言語の教授、また二言語教育の実施などが挙げられる。「民族平等と団結」の理念は、2022年現在でも中国民族問題において重視されている理念である。

ところが、2000年以降は世界での競争力を向上し、中華民族像を強調すること、「民族平等と団結」の方針は「漢民族と少数民族が共に中華人民共和国を発展させる」ことに転換した。少数民族内部においても、漢民族の歴史に触れることにより、中国を愛し、共産党

を愛する覚悟を高め、「中華民族共同体意識」を育むことが強調されるようになった（内モンゴル自治区教育庁）。2020年には「内モンゴルの民族学校では「道徳与法治」「語文（漢語教育を指す）」「歴史」の3教科を全国的に統一し編集した教材を使い、国家通用言語つまり漢語を使用して教学する」ことが中央政府によって決定された。この規定に対して内モンゴル自治区各地域では反乱が起り、民族教育問題から社会問題にまで激化した。しかしその一方で、少数民族の言語は漢語を基盤とした社会に飲み込まれ、民族言語は家庭や学校でしか使用しない言語になりがちであることも指摘されている（格日樂 2006）。

このような背景のもと、少数民族学校は如何にして民族アイデンティティを育成しているのか、児童・生徒達が有するアイデンティティの特徴は何かを明らかにすることを試みる。アイデンティティは個人と社会とをつなぐ概念の一つであり、「自分が何か」の意味付けとして個人的側面と、社会との相互的關係によってそれが形成され、維持されるという社会的側面との双方を含み、集団帰属意識、役割意識等に関連して使われてきた（恒吉2012：6）。一個の自由な個人が有する、多面的・複層的な概念であり、個人が単一的（例えば文化・宗教のような）「アイデンティティ」に拘束されるのではなく、複数のアイデンティティのなかから、個人が理性により「選び抜く」ものである、セン（2011：259）は主張する。グローバル化・複雑化した世界において、非常に複雑で複合的な文化・言語環境の中にある者たちは、複数のアイデンティティが重層的に交錯し、併存したり葛藤したり競合したりしながら、アイデンティティが形成されたり変容したり

* 名古屋大学大学院学生

している様子が確認されている（丸井2012：206）。

本稿の構成は、次の通りである。第1章では、中国の少数民族教育における政策を概観する。第2章では、民族学校における教育実践に関する先行研究を整理する。最後に、複数のアイデンティティの視点から中国における少数民族教育を分析する必要性を述べる。

1. 中国の少数民族教育における「多元文化政策」

1970年代以降、多くの多民族国家において、新たな社会統合の理念として多文化主義が提唱されてきた。多文化主義については、「どのような多文化主義が望ましいのか」「そもそも多文化主義は望ましいのか」という議論が、20世紀終盤から世界各国で連綿と続けられている。ただし政策レベルでの議論の多くはいずれも「多言語主義」を推進する立場から発せられたもので、「多文化主義」をめぐる展開には繋がらない。「多言語」はマジョリティにとって大きな摩擦や葛藤なしに受け入れられたとしても、「多文化」となると他の民族とどのような社会を構築して行くかがテーマとなるため、その受け入れに関する議論は一筋縄でなくなる傾向がある（馬淵2011：154）。多文化主義が同国の政治や教育など様々な分野においてどのように位置づけられてきたのかを総体的な再検討が必要がある（馬淵2011：159）。

登坂（2004）は関根政美による社会統合のためのアプローチ①「人種（差別）主義アプローチ」、②「同化主義アプローチ」、③「多元主義的アプローチ」（リベラル多元主義、コーポレート多元主義）理論をもとに、中国の少数民族教育は多元主義の下位分類である「リベラル多元主義」に近いと特徴づけた。中国の多元文化政策は欧米の多文化・多民族国家とは異なる「中国理論」であり、中国なりの特徴をもつという。具体的には、中国の少数民族教育とは、少数民族文化の独自性保持を文化相対主義の立場から権利として認めそれを積極的に保護する立場であるというより、少数民族地域を経済発展の足枷と見なし、中央の管理のもとで訓育すべきものとする視点に基づく（登坂 2004）。

多民族国家である中国は、中国なりに長期間にわたり形成されてきた歴史的特徴と社会的現実があるため、欧米に見られる多文化教育と異なる特徴を持っていると言われている（孫2013:113）。中国の社会学者、民族学者である費は1988年に「中華民族多元一体構造」を発表し、「中華民族」像を初めて示した。費の「中華民族多元一体構造」論（略して「多元一体論」と呼ばれている）は中国の民族政策や言語政策の方向性を

示したものとして、発表された当初から中国教育研究界に肯定的に受け止められてきた。主な論点として、中国領内に住む諸民族は漢民族を中心とする「中華民族」になっており、その構造は「多元かつ一体」であり、その構成員に中華民族と自民族のアイデンティティが共存している。ここに示す全体的な中華文化とは、漢族の作り上げてきた漢文化とそれぞれの少数民族文化、およびその両者の密接な関係と相互作用や相互浸透のなかで形成されたものであると言われている（李2005：232）。

しかし、1937年の中国共産党の考える「中国」は、漢、満、蒙（モンゴル）、回、藏（チベット）の「五族の土地」すべてを包摂するようになり、「中国人」、「中華民族」とは漢プロレタリアのみならず、中華民族の主権範囲、すなわち「五族の土地」内に住む全てを民族も指している（陳2019:松本1999）。国家統合と安全保障によって、中国における漢民族と少数民族の関係は五族共同の国家建設から経済、人口、政治などの影響を受けて複雑な過程を経てきた。中華文化を最初に作り上げたのは漢民族ではなく、「五族」であったとも言われている。「中華民族」という概念は、政治的な意図のもとに人為的に作られたものであり、中国の近代史上で国家形態が国民国家へと向かう過程で出現してきたものなのである（李2005：231）。

このように中国の「多元一体論」において「中華民族」は上位にあり、自民族は下位に置かれているという視点が現れたのである（李2005）。これを機に、中国における少数民族教育政策は上位にある「中華民族」のアイデンティティと、下位にあるそれぞれの自民族のアイデンティティという二重のアイデンティティを持つようになった。

中国少数民族教育に関する政策を、「統合教育政策」、「特別な優遇政策」、民族地域における「文化の繁栄のための政策」の3つに分けて、それぞれの与える影響を検討した研究も見られる（ハスエル敦ハスエルドン2005）。ハスエルドンは、中国の少数民族教育の政策が少数民族の文化的繁栄を促進する一方、「国民統合」を目指す「統合政策」を実施していると指摘し、その矛盾をもつ教育政策の下に置かれる少数民族教育は発展上の矛盾を抱えていると述べている。また少数民族の言語・文字と文化を発展させるための「優遇政策」を通して、少数民族教育はハード面での発展は遂げているが、他方で少数民族言語・文字による教育は衰退に陥り、民族伝統文化の教育が厳しい状況に直面するという矛盾が生じていることを指摘した。そして少数民族教育に対する「優遇政策」の理念は、結果と

して「統合教育政策」の理念と一致したものであり、同化のためであると結論づけている。中国の言語、文字に対する政策の1つであるバイリンガル教育では、少数民族語と漢字の習得を重要な目的とする多数派言語を習得する割合によって、同化を目的とする教育にもなる、と市瀬（2000）は指摘している。

以上の研究者らは、中国少数民族教育政策を分析する際に理論を用いて検証しながら、少数民族教育を定義し、特徴づけていることに共通点がある。また、中国の民族教育政策を客観的に捉え、それらの政策の少数民族に与える影響を提示し、結果的に国民統合に有益になることを明らかにした。しかし、それでもなお、少数民族が自民族に対していかなる考えを持っているのか、その実態を理解し分析する必要があると考える。次節では少数民族学校における教育実践を対象とした先行研究に絞ってこの論点を整理していく。

2. 中国の少数民族学校における教育実践

本節では、中国の少数民族学校における教育実践を先行研究から見ていく。イ族の民族学校のカリキュラムと教授言語を分析した小川（1997）は、中国国民統合のための教育政策には「優遇」面と「統制」面という両面が見られることを指摘している。少数民族は教育を受ければ受けるほど、「優遇」されると同時に「統制」されるということになり、エリートになればなるほど、漢族主流文化に組み込まれていく。その結果、民族化への道は必ずしも中華民族化（国民形成）と矛盾するものになっておらず、イ語重視政策はイ族側に基本的に歓迎され、教育効果も上がり、結局国民統合（民族団結）に有益であること、しかしその一方で、漢語の優位性が明らかな現状ではイ族自身がイ語拡大を全面的に歓迎していないことが明らかにされている。

中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状と課題を明らかにしたウルゲンは、民族としてのアイデンティティ形成の視点から愛国教育、「国民・国家」政策の影響を明らかにし、以下の3点を指摘した。第一に、内モンゴル自治区の生活実態とその家庭教育に合致していない教育を受けた児童たちが、身につけつつあったアイデンティティを見失い、アイデンティティの混乱による自己不全に陥っていること。第二に、中国の「多元一体」政策のもとに行われている少数民族学校教育はモンゴル民族の若者のアイデンティティ形成を阻害していること。第三に、学校教育の中で、自民族の伝統文化を教えることが少なくなり、「中国式の特色のある社会主義国家」の教育理念が、少数民族の若者の自己不全感をもたらしていることである

（ウルゲン2013：5-14）。ウルゲンの研究は、中国の政策と少数民族教育の関係を、目的や政策意図、教育方法や教育内容だけでなく、教育による児童・生徒の文化的変容についても明らかにした点で意義がある。さらに、民族教育によるアイデンティティの阻害に着目した研究は、今までになかった新たな視点をもたらすものであり、価値があると考えられる。

ハスゲレル（2005）は、モンゴル民族小中学校で使用されている国語（モンゴル語）と歴史教科書の分析から、モンゴル語の教科書はモンゴル民族の遊牧生活の状況や変化に関する伝統文化を記述することに留まっているため、モンゴル民族の現状を紹介する内容が不足しており、故郷の美しさと豊かさばかりの記述が抽象的な価値を押し付けていると指摘した。そのうえで、少数民族教育に関する研究では主にその理念や教育の現状が注目されるようになってきたが、少数民族の文化が何に影響されているか、それに対してどのような政策を実施すべきか、というさまざまな問題点に関する研究はみられないこと、民族学校用の教科書に文化史、民族史の内容が少ないことを指摘し、少数民族教育の理論上の研究は不可欠であるが、教育内容に関する研究も大切であると強調している（ハスゲレル2005：43）。

内モンゴル自治区の牧畜地域にある民族学校の実態を、言語教育に焦点を当てて調査した研究にボルジギン・ムンクバトがある。ボルジギンは内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育を、民族学校の統廃合、民族学生の学校選択、モンゴル人学生の言語使用、「モンゴル語」教科書、「モンゴル語科目学習指導要領」など多様なテーマに基づいて調査を行った。ムンクバトの調査によれば、牧畜地域における民族学校は過度に統合され一箇所にまとめられ、牧畜民と彼らの子弟に大きな試練を与えているという（ムンクバト2011：73）。また、民族学校に行われるバイリンガル教育は漢語の同化が仕組まれた「二言語教育」「双語教育」と評価している（ムンクバト2012：16）。モンゴル人の児童生徒が母語であるモンゴル語による教育を受けず、幼稚園の時から漢語で教育を受けて、幼い頃から漢語の世界に溶け込むことは、モンゴル族の言語・文化の発展に深刻な影響を及ぼす。さらに、モンゴル人子どもたちを取り巻く言語環境はすでに変わっており、漢語が有利になり、学校における教授言語もモンゴル語から漢語にシフトされている（ムンクバト2012：113）。牧畜地域の言語使用について、家庭内ではモンゴル語を使う学生が多く、買い物など社会生活において漢語を使う場合が多い。モンゴル語は家庭や学校と

いう非常に限定された場で用いられる言語となり、学生たちが一步社会に踏み出せば漢語の世界が広がっているが、学校側のモンゴル語に対する保護・維持のための取り組みさえ上手くいかないことがある（ムンクバト2013:212）。都市部では漢語・漢化による同化が進み、モンゴル語の使用頻度が減少し、モンゴル語が使えなくなった子供が多くなることで、教科書の内容や量などにも変更が見られる。モンゴル語ができなくなった子どもに対して、モンゴル語に親しみモンゴル語を使えるようにするため、基本的に漢語による教育を行い、モンゴル語がー科目として学習される特別なカリキュラムを用いて、主にモンゴル語の復帰への試みが行われている学校もある（ムンクバト2013:128）。

上述した研究者たちは、内モンゴル自治区の民族教育に対してどちらかと言えば否定的な立場をとっており、モンゴル民族の教育が中国社会において不利な状況にあり、自民族のアイデンティティの形成に何らかの影響を与えている共通点を読み取れる。表1は、上述したモンゴル民族教育の代表的な先行研究について、その研究目的、問題意識、研究方法と研究対象、分析の視点と分析結果をまとめたものである。表1で示すように、内モンゴル自治区の民族教育研究はモンゴル民族が漢民族に同化されているという視点に基づいて、少数民族を被害者であると見做し、少数民族としてのアイデンティティを強調しすぎる傾向がある。また、筆者たちの立場から見ると、少数民族教育政策

表1 モンゴル民族教育をめぐる先行研究の比較表

筆者の立場	筆者	研究目的	問題意識	研究方法	研究対象	分析視点	結果
「多元一体」論の批判	ウルゲン (2013, 2015)	「中国人」という愛国教育、「国民・国家」という観念の下に推進された政策の影響を明らかにする	「中国の特色ある社会主義」と「多元一体」の政策がアイデンティティを阻害している	アンケート調査 資料分析 (政策文書, 報告書などの整理, 歴史資料) 保護者への聞き取り調査	〈政策〉 国民国家 統合政策 〈教科書〉 道徳, 歴史 〈カリキュラム〉 初等カリキュラム	民族としてのアイデンティティの形成	中国教育政策は内モンゴル自治区民族のアイデンティティの形成を阻害している
民族教育における教科書の内容に関する批判	ハスゲレル (2005)	モンゴル民族の小中学校の国語(モンゴル語)と歴史教科書を分析し、教育内容のあり方を検討する	少数民族地域の教育改革は遅れている	教科書分析 資料分析 (「教学計画」 「教学大綱」)	〈政策〉 教科書編纂 基本方針 教科目的 〈教科書〉 モンゴル語 歴史	自民族のアイデンティティの育成	モンゴル民族の歴史の教科書はなく、子どもたちは自民族の歴史を学ぶ機会が少ない
「多元文化」政策による同化の批判	ハス額ル敦 (ハスエルド) (2005)	多面性をもつ教育政策の下での「民族教育」の発展の矛盾を分析し、民族教育の抱える問題を明らかにする	多面性をもつ教育政策が民族教育の中で政策・理論と現実の大きな食い違いをもたらしている	資料分析 (政策文書, 統計資料)	〈政策〉 統合教育政策 優遇政策 民族文化の繁栄のための政策 (言語・文字)	多元文化論	少数民族教育に対する政策は、漢民族同化をもたらす結果となっている
民族教育のあり方に対する批判	ボルジギン・ムンクバト (2011, 2012, 2013, 2014, 2015)	牧畜地域を中心にモンゴル語の使用、モンゴル民族学校の実態を明らかにすることを試みた	牧畜地域においてモンゴル民族学校の廃統合が行われ、民族言語の使用が衰えている	現地調査 アンケート調査 聞き取り調査	モンゴル民族学校 モンゴル語の教育 モンゴル語・文字の使用 関連法律規定	漢語・漢化の同化	漢化の影響を強く受けている学校と同化されつつある学校、また同化された学校も見られる

に対して批判し、学校カリキュラム、教科書について否定的な立場が多いが、肯定的な意見もみられる。例えば、「牧畜地域の家庭においてモンゴル語を使う場合が多く、ある学校においてモンゴル語の復帰への試みが行われている」という事例や、地域によって内モンゴル民族教育に対して肯定的な立場を取る研究者もいる（ムンクバト2015）。

しかし、ボルジギンが主張するように、彼の研究は内モンゴルの牧畜地域に焦点を当てたため、特定の地域の事例である限界が見られる。内モンゴル自治区は都市部、牧畜地域、農業と牧畜両方を従事する半農半牧地域の三つに分けられる。民族学校の教育や日常的に活用するモンゴル語の使用頻度は、これらの地域によってかなり違いがある。モンゴル語の使用率が最も高い地域は牧畜地域である（ボルジギン2015）。他方、半農半牧地域では都市部と同じく日常的にモンゴル語を活用する機会は少ない。そのため、内モンゴル自治区の民族教育の実態を把握するには、他地域の教育状況も言及する必要がある。

以上述べたように、中国の少数民族学校における教育実践についての先行研究において少数民族教育に対する政策を批判し、それらがもたらす結果は漢民族同化に違いないと考えていることが示唆される。しかし、いずれの研究においても内モンゴル民族学校の実態、つまり、学校教育はいかに行われているのか、現場の教師はモンゴル民族アイデンティティの育成にいかに関与しているのかについては十分に解明されていない。

結語

本稿では、中国の少数民族教育における政策と実践に関する先行研究を分析してきた。その結果、中国少数民族教育を支える政策である「多元一体構造論」において、そもそも「中華民族」と「自民族」という複数のアイデンティティを含む特徴があることが明らかになった。また、中国少数民族教育の政策は、モンゴル民族としてのアイデンティティの形成を阻害し、同化を促していたことが明らかになった。

しかし、先行研究では、政策分析やカリキュラム、教科書などの分析にとどまり、実際の授業を分析した研究や児童生徒がどのように受け止めているのかという質的な側面については明らかにされていない。少数民族教育の実態を調査した研究においては、現地の児童生徒、教師の抱える課題についての分析が行われてこなかった。さらに、中国社会で生きていく少数民族には、自民族としてのアイデンティティだけではなく、

中華民族としてのアイデンティティが求められるにもかかわらず、複数のアイデンティティを有することを前提とした分析が行われていない。少数民族としてのアイデンティティが育まれているのか、疎外されているのかという2極化した考え方ではなく、複数のアイデンティティを有するというを前提としながら研究することが必要である。

〔参考文献〕

- アマルティア・セン, 2011, 『アイデンティティと暴力』 勁草書房。
- 市瀬智紀, 2000, 「中国少数民族のバイリンガル教育の概観—その教育モデルと実践」『異文化教育』第14号 pp. 133-141
- 小川佳万, 1994, 「中国における少数民族高等教育政策—「優遇」と「統制」のメカニズム—」比較教育学研究第20号 pp. 93-104
- 小川佳万, 1997, 「中国の学校教育における少数民族言語の位相—涼山イ族自治州のケースから—」カリキュラム研究第6号 pp. 101-112
- 小川佳万, 2001, 『社会主義中国における少数民族教育—「民族平等」理念の展開—』 東信堂
- 格日樂, 2006, 「中国民族教育における教育自治権について：民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に」『一橋大学大学院法学研究科』第5巻3号 pp. 1041-1064
- 孫義, 2013, 「中国における多元文化教育の生成と展開—初期導入解明に向けて—」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊20号-2, pp. 105-115
- 陳烏日汗, 2019, 「中国における少数民族教育—その背景と課題—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第66巻第2号, pp. 73-79
- 登坂学, 2004, 「中国少数民族教育の概念に関する一考察—「多文化教育」と中国「少数民族教育」の比較を通じて—」『九州保健福祉大学研究紀要』 pp. 85-93
- ハス額ル敦（ハスエルドン）, 2005, 「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題—内モンゴル自治区の民族教育を中心に—」『多元文化』第5号 pp. 265-280
- ハスゲレル, 2005, 「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題—教科書分析を中心に—」『国際教育』第11号 pp. 43-62
- ボルジギン・ブレンサイン, 2015 『内モンゴルを知る

- ための60章』明石書店
- ボルジギン・ムンクバト, 2011, 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校について—西ウジムチン旗の民族学校の統廃合からみる—」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』13: 67-75
- ボルジギン・ムンクバト, 2012, 「内モンゴル自治区における民族学校の言語教育について—モンゴル民族学校, 漢民族, 日本の小学校と在日朝鮮人学校のカリキュラム比較からの一考察—」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』第239集 pp. 5-20
- ボルジギン・ムンクバト, 2012, 「内モンゴル自治区における放牧地域の民族教育の現状—民族学生の学校選択に関する一考察—」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』14: 105-116
- ボルジギン・ムンクバト, 2013, 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校の実態—モンゴル人学生の言語使用に関するアンケート調査か」千葉大学人文社会科学研究所研究27号 pp. 205-213
- ボルジギン・ムンクバト, 2013, 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の学校教育の現状について—甲・乙式学級の「モンゴル語」教科書の比較から—」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』15: 121-130
- ボルジギン・ムンクバト, 2014, 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校に教える「モンゴル語」—甲・乙式学級の「モンゴル語科目学習指導要領」の比較から—」千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』275巻 pp. 29-48
- ボルジギン・ムンクバト, 2014, 「内モンゴル自治区におけるモンゴル文字の使用について—その使用事例や法律規定からの一考察」千葉大学人文社会科学研究所研究28号 pp. 237-247
- ボルジギン・ムンクバト, 2015, 「内モンゴルにおける言語使用の実態—モンゴル人学生の言語使用に関するアンケート調査から—」千葉大学人文社会科学研究所研究』31巻 pp. 144-153
- 馬淵仁, 2011, 『「多文化共生」は可能か—教育における挑戦—』勁草書房
- 丸井ふみ子, 2012, 「アイデンティティ研究の動向—異文化接触・言語との関係を中心に—」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院, pp. 193-209.
- 宮崎里司, 2017, 『グローバル化と言語政策—サステイナブルな共生社会・言語教育の構築に向けて—』明石書店
- 毛利和子, 1998, 『周縁からの中国民族問題と国家』東京大学出版社
- 李明玉, 2005, 「「中華民族」の概念とエスニシティ—一元的教育がもたらすもの—」北海道大学大学院教育学研究紀要96号 pp. 227-248

閲覧サイト

- 内モンゴル自治区教育庁 WeChat 公式サイト, 閲覧日: 2022年11月30日
- 中国教育信息网 https://web.ict.edu.cn/news/yaodian/n20220818_80462.shtml 閲覧日: 2022年10月25日

The Influence of Ethnic Minority Education on Identity Formation in China

Wurihan CHEN*

This paper analyzes previous research on policy and practice in ethnic minority education in China. It finds that the policy underlying Chinese ethnic minority education, the “pluralistic unitary structure theory” is characterized as including multiple identities of “ethnic Chinese” and “autonomous” ethnic groups. The policy of ethnic Chinese minority education inhibited the formation of an identity as ethnic Mongolians over an encouragement of assimilation.

Previous studies have analyzed policy, curriculum, and educational materials, but have not clarified the qualitative aspects of research such as an analysis of the actual classes and how the students perceive them. In studies that investigate the actual situation of minority education, issues that had not been addressed by local students and teachers are clarified.

Furthermore, even though ethnic minorities living in Chinese society are expected to identify as Chinese as well as their own ethnic identity, no analysis has been conducted on the assumption that they have multiple identities. Rather than a polarized view of whether an ethnic minority identity is being nurtured or marginalized, research should be conducted with the assumption that one may have multiple identities.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

